令和５年度　長崎県立長崎図書館郷土資料センター　企画展示２

〝原爆乙女〟渡辺千恵子の歩み

―没後30年を迎えて―

（長崎総合科学大学長崎平和文化研究所所蔵資料より）

展示期間

令和５年７月４日（火）
～同年８月20日（日）

はじめに

県立長崎図書館郷土資料センターは、特に明治以降、長崎県内で作成された郷土資料に特化して、資料収集・保管および提供する施設として活動しています。しかし、郷土資料収集については、当然、当センターの収集活動で完結するものではなく、県内の他機関と連携を図り、資料の所在を周知し、かつその活用促進することも必要な役割だと考えます。

長崎の近現代史を知るうえで、原爆被災に関する資料は欠くことのできない重要な構成要素であり、今回は長崎総合科学大学長崎平和文化研究所に収蔵される渡辺千恵子氏関係資料を同研究所の協力のもとで紹介します。

車いすの被爆者として被爆の実相を伝える活動を担った渡辺千恵子氏に関する資料は、1993 年に亡くなったあと、生前交流のあった日比野正己氏が譲り受け、その後、日比野氏がかつて勤務されていた長崎総合科学大学へ寄贈されたものです。今年は、渡辺千恵子氏の没後 30 年という節目の年に当たります。

令和５年７月４日

長崎県立長崎図書館

郷土資料センター

渡辺千恵子略年譜

時期	年代	齢	事項
第一の人生	昭和 3(1928)年		9 月 5 日　長崎市銅座町で履物問屋の家に生まれる（８人兄弟）
	昭和 16(1941)年	13	私立鶴鳴女学校へ進学
	昭和 17(1942)年	14	〔この頃から学徒動員が始まる〕
第二の人生	昭和 20(1945)年	17	8 月 9 日　学徒動員先の三菱電機製作所（当時平戸小屋町）で被爆、鉄骨の下敷きとなり脊椎を骨折 8 月 15 日　〔日本の無条件降伏＝終戦〕
	戦後 10 年間		下半身不随、自宅の布団に臥せる生活、ときに自暴自棄となり、自殺さえ考えた暗い 10 年間を過ごす
	昭和 29(1954)年	26	8 月 4 日付毎日新聞で「寝たままの原爆乙女」の見出しで紹介記事
第三の人生	昭和 30(1955)年	27	6 月 5 日　第一回長崎県母親大会に参加した居原喜久江、鶴見和子らの訪問を受け、原爆被害を語ろうと激励 その後、4 人の若い被爆女性とともに、長崎で被爆者団体「原爆乙女の会」を結成 7 月 20 日　機関紙「原爆だより」創刊 8 月　第一回原水爆禁止世界大会（広島）に乙女の会から山口美佐子・辻幸江の 2 人が参加
	昭和 31(1956)年	28	5 月 3 日　「長崎原爆青年会」と合流し「長崎原爆青年乙女の会」結成、機関紙「ながさき」に改題 8 月 9 日　第二回原水爆禁止世界大会（長崎）で母に抱き抱えられて壇上から発言
	昭和 33(1958)年	30	8 月　第四回世界大会（東京）に参加　以後たびたび参加
	昭和 34(1959)年	31	原爆症に認定される
	昭和 48(1973)年	45	最初の著書『長崎に生きる』刊行
	昭和 51(1976)年	48	両足アキレス腱切断、脊椎を削り平らにする手術を行う
第四の人生	昭和 52(1977)年	49	8 月 9 日平和祈念式典で「平和への誓い」を読む
	昭和 53(1978)年	50	長与町に車いすで生活できる家が完成して移る、 車いすで初めて海外へ、スイス・ジュネーブの NGO 軍縮国際会議に参加
	昭和 55(1980)々	52	7 月　『長崎を忘れない』刊行、8 月文通相手の鈴木千鶴さんと対面
	昭和 57(1982)年	54	北海道「反核・平和の旅」へ このほか千恵子は全国各地へ「平和の旅」を重ねる ニューヨーク「第 2 回国連軍縮特別総会」参加、各地で講演
	昭和 62(1987)年	59	『長崎よ、誓いの火よ』刊行
	昭和 64(1989)年	61	日本のうたごえ祭典で合唱組曲「平和の旅」上演（千恵子も参加）
	平成 4(1992)年	64	心不全で入院
	平成 5(1993)年	65	3 月 13 日　入院先で死去

『長崎に生きる―”原爆乙女”渡辺千恵子の歩み』新装版 2015 年より作成

展示資料一覧

展示資料は、可能な限りオリジナルな資料を展示していますが、諸事情から一部、複写を使用したり資料保全のため一部展示物を入れ換えたりすることがありますので、ご了解ください。

番号	資料	作成年等
1	〔写真パネル〕（森下一徹氏撮影）	1980 年

第 1 部　被爆前（「第一の人生」）から被爆後 10 年間（「第二の人生」）まで

番号	資料名	作成年等
2	〔写真〕同級生・学徒動員	
3	〔地図〕被爆地点：三菱電機	
4	〔複写〕8 月 9 日被爆時の証言	
5	〔図書〕原爆青年乙女の会編集『もういやだ』1 集(郷土資料センター所蔵)	1956 年 8 月 1 日
6	〔写真〕家のなかで家族と	1953 年 9 月
7	〔新聞記事（毎日新聞）〕寝たままの原爆乙女	1954 年 8 月 4 日

第 2 部　”原爆乙女”へ　「第三の人生」

番号	資料名	作成年等
8	〔写真〕鶴見和子氏ら訪問	1955 年 6 月 5 日
9	〔図書『エンピツを握る主婦』〕鶴見より渡辺千恵子氏宛署名・日付入り	
10	〔図書『母の歴史』〕鶴見より母スガ宛署名・日付入り	
11	〔写真〕鶴見和子氏らと、日本平和学会　長崎総合科学大学にて	1980 年 4 月
12	〔写真〕原爆乙女の会の友人らと　（第 1 回原水禁世界大会関係）	1955 年
13	〔「原爆だより」第 1 号　〕	1955 年 7 月 20 日
14	（1 号 2 面の複写）鶴見・渡辺往復書簡	
15	〔書簡〕鶴見和子書簡	1955 年 6 月 29 日
16	〔「原爆だより」第 3 号　3 面〕被爆者の会結成よびかけ	1955 年 9 月 20 日
17	〔「ながさき」8 号〕原爆だより改題と表記	1956 年 6 月 23 日
18	〔「ながさき」9 号〕冊子体での発行	1956 年 9 月 13 日
19	「原爆だより」「ながさき」記事一覧表	
20	〔「ながさき」15 号〕	1960 年 8 月 6 日
21	〔写真〕第 2 回原水爆禁止世界大会壇上での訴え	1956 年 8 月 9 日
22	〔手書き原稿〕第 2 回原水爆禁止世界大会の訴えの原稿	1956 年 8 月 9 日
23	〔バッジ〕第 2 回原水爆禁止世界大会代表	1956 年
24	〔写真〕第 2 回原水爆禁止世界大会会場の東高正門など	1956 年
25	〔写真〕第 4 回原水爆禁止世界大会で（東京で、木下澄子氏と）	1958 年 8 月
26	〔バッジ〕第 4 回原水爆禁止世界大会	1958 年
27	〔写真〕第 10 回原水爆禁止世界大会（京都）	1964 年 8 月
28	〔バッジ〕第 10 回原水爆禁止世界大会代表	1964 年
29	〔写真〕第 12 回原水爆禁止世界大会（長崎にて）	1966 年 8 月

30	〔バッジ〕第 12 回原水爆禁止世界大会代表	1966 年
31	〔写真〕編み物作業	
32	〔師範認証〕（額縁入り）渡辺千恵子あて全日本編物技芸協会	1957 年 6 月 15 日
33	〔写真〕海水浴場にて	

第 3 部　第四の人生へ　車いすでの自立生活と「平和の旅」へ

番号	資　料	作成年等
34	〔写真〕音無町の自宅室内　　森下一徹『被爆者』より	
35	〔室内図面〕日比野正己「被爆者の住宅づくり・まちづくり」より	1977 年
36	〔写真〕長与町新居（「千恵子の家」）室内	1978 年
37	〔図面〕長与町自宅図面	
38	〔写真〕長与町自宅敷地内	
39	〔図書〕日比野正己『シリーズ　福祉に生きる 7　渡辺千恵子』	1998 年
40	〔新聞記事切り抜き〕毎日新聞“重度被爆者住宅”が完成	1978 年 2 月 3 日
41	〔エッセイ〕『季刊　科学と思想』1981 年 1 月号より	1981 年 1 月
42	〔リーフレット〕式平和祈念式典次第、　（活版、4 頁）	1977 年 8 月 9 日
43	〔写真〕平和祈念式典での訴え	1977 年 8 月 9 日
44	〔手書き複写〕「平和への誓い」	
45	〔ノート〕『大会原稿の写し』	
46	〔谷口稜曄氏の渡辺評〕『谷口稜曄聞き書き 原爆を背負って』より	2014 年
47	〔写真〕1978 年 NGO 軍縮会議　（総会会議場風景など）	1978 年 3 月 2 日
48	〔新聞記事切り抜き〕読売新聞	1978 年 3 月 4 日
49	〔写真〕1982 年 SSD II に伴うアメリカ遊説活動	1982 年 6 月
50	〔新聞記事切り抜き〕西日本新聞	1982 年 6 月 6 日
51	〔写真〕サウスカロライナ州サバンナリバー反核集会	1982 年 6 月 6 日
52	〔手書き原稿〕反核集会での演説原稿、（手書き原稿用紙、6 枚）	1982 年 6 月 6 日
53	〔図書〕『長崎に生きる』	
54	〔書類〕『長崎に生きる』出版契約書、増刷関連書類	
55	〔写真〕平和公園で鈴木千鶴さんと	1980 年 8 月 6 日
56	〔書簡〕鈴木千鶴さん中学生時の手紙	1978 年 10 月 14 日
57	〔図書〕『長崎を忘れない』（渡辺 千恵子／作, 東本 つね／絵 ）	1980 年 7 月
58	〔増刷発行のご連絡〕	1988 年 7 月
59	〔新聞記事切り抜き〕長崎新聞	1978 年 7 月
60	〔帽子〕2 点	
61	〔図書〕『長崎よ、誓いの火よ（わたしの青春アルバム）』	1987 年
62	〔図書〕『長崎に燃えよ、オリンポスの火』（橋本進氏との共著）	1983 年
63	〔写真〕長崎市立緑が丘中学校での平和式典風景	1978 年 8 月 10 日
64	〔写真〕母校の鶴鳴学園にて講演	1987 年 10 月 15 日
65	〔写真〕北海道オホーツク民衆史講座 100 回記念集会	1982 年 4 月 29 日
66	〔写真〕猪俣志保さんと控室にて	1982 年 4 月 29 日
67	〔木彫彫刻〕、（表）写真	1982 年 4 月 29 日

68	〔写真〕1983 年 END 第 2 回大会など　（ギリシャなど）	
69	〔写真〕ギリシャにて 10 万人デモに参加	
70	〔写真〕オリンピアの火の贈呈受取式　（平和公園にて）	1983 年 8 月 7 日
71	〔誓いの火灯火台建設ニュース 18 号〕　（謄写版、表裏 1 枚）	1987 年 7 月
72	〔写真〕長崎を最後の被爆地とする誓いの火	
73	〔冊子〕『平和の旅へ』楽譜と台本	1988 年
74	〔写真〕第 6 回長崎平和コンサートコンサート会場	1988 年 8 月 6 日、
75	〔ＣＤ・ＤＶＤ〕　『平和の旅へ』（ＣＤ2002 年　DVD2022 年）	
76	〔案内状〕原爆青年乙女の会 25 周年の集い	1980 年 7 月
77	〔写真〕原爆青年乙女の会　25 周年の集い	1980 年 8 月 9 日
78	〔湯飲み（陶器）〕25 周年記念品	
79	〔ペーパーウェイト（金属製）〕30 周年記念	
80	〔写真〕告別式	1993 年 3 月 20 日

関連映像〔DVD 等〕

番号	資料	作成年等
1	DVD『合唱と語りによる構成　平和の旅へ』	2022 年
2	〔講演録画〕長崎総合科学大学での授業（クラスアワー）記録	1989 年 6 月 6 日
3	〔原爆と車いす〕NBC 特別番組	1993 年 4 月
4	〔証言『被爆を語る』〕平和推進協会	1990 年 7 月 1 日

（追記）

本展示については、長崎総合科学大学長崎平和文化研究所、および科研費 23H00893（研究代表者：木永勝也）助成の協力によるものです。

展示物の説明・キャプション、一覧の資料名や作成年等の記述の文責は、担当者(客員研究員の木永勝也)にあります。訂正などがありましたら、kinaga_katsuya@campus.nias.ac.jp（kinaga と katsuya の間は、アンダーバー）までお知らせください。

1956年8月9日　第二回世界大会総会　での訴え

私は長崎原爆青年乙女の会の渡辺千恵子でございます。

長崎大会は私にとっては二度とないよい機会でございますので、母の手を借りて出席さしていただきます。

大会にご出席の皆さま、みじめなこの姿を見てください。私が多くを語らなくとも原爆の恐ろしさはわかっていただけるものと思います。

学徒報国隊のとき原爆にあい、鉄筋のハリの下敷きとなって腰から下がぜんぜんきかなくなってしまいました。上半身だけで生きつづけている私は母なくしては生きていられないのです。なんで私たちは苦しまなければならないのでしょうか。

いくたびか死を宣告され、いくたびか死のうとさえ思ったわたしでしたが、母の愛にはどうしても勝つことができませでした。十年間、まったくかえりみられなかった私たち被爆者は、昨年の広島大会で初めて生きる希望が出てまいりました。これも皆さまがたとわたしたち被爆者とがしっかりと手を握ることができたからではないでしょうか。皆さま、ほんとうにありがとうございました。

今年の春、“生きていてよかった”のロケに出演したのがきっかけとなって、私は被爆後十一年目に、はじめて長崎が原爆の廃墟から復興した姿をこの目でみることができました。

わたしが被爆した三菱電機へも行ったのですが、あの日のしっしゃげた（ひしゃげた）鉄骨も、暗い工場もすっかりかわって、今は明るい近代的な工場がどうどうと立ち並んでいました。でもわたしの青春はもう二度ともとの姿に返ってこないのです。それなのに、工場のすぐ前の港には、不気味なまっ黒い煙をもくもくと吹き上げている軍艦を見たとき、戦争の予感さえ感じ、十一年前の今日の日がハッキリと思い出されてなりません。

原爆犠牲者はもう私たちだけでたくさんです。原爆はわたしの体を生まれもつかぬかたわにしてしまいましたが、私の心まで傷つけることはできませんでした。

最後に、私は先日、原爆のいけにえとして、現在、長崎大学病院に入院しておられる患者さんをお見舞いさしていただきましたが、白血病のため何回か死線をさまよわれ、いまは腹が大きくはれあがって明日の命さえわからず、原子病のお薬が一日も早く欲しいと、またほかの患者さんは、自宅療養七年で商売も破産し、どん底の生活のため二人の幼い子どもさんはベッドの下で、患者さんの残飯で生きておられ、生活の保障をなによりも痛切に訴えておられました。これは全国被爆者のみんなの願いなのです。

世界の皆さま、原水爆をどうかみんなの力でやめさせてください。そして、私たちがほんとうに心から、生きていてよかったという日が一日も早く実現できますよう、お願いいたします。

（全文、『長崎に生きる（新装版）』新日本出版社、2015年、120-122頁　より）

当時のものは、「第2回原水禁世界大会議事速報（第一日）」（1956年）

（『原水爆禁止運動資料集』第3巻、緑陰書房）にある。

1977年8月9日　長崎平和祈念式典　平和への誓い

この丘に立つと、燃えさかる炎のなかを、おびただしい負傷者の群れが逃げ場を求め、さまよった姿が目に浮かびます。ムシロの上に身を横たえ、「水を、水を」と哀願する声、「痛いよう、痛いよう」泣くようなうめき声、必死になって親を、子を、兄弟を探し求める声、この世の、ありとあらゆる苦しみの声が今も聞こえてきます。

八月九日、この日は私たち被爆者と遺族にとって、とてもつらい思い出の日です。原爆は生き残った者の生命さえ奪おうと、今なお私たちの身体から離れようとしません。被爆してからの日々を、病気や貧困、差別、放射能障害と闘って生きてきた被爆者にとっての三十二年間は、その苦しみ、不安をさらに積み重ねた年月でした。

しかし、私たちの、核兵器を完全になくしたい、核戦争を二度と繰り返してはいけないという誓い、被爆者は私たちだけでもうたくさんという願いをよそに、核兵器開発はとどまるところを知らず、核保有国を中心に開発に狂奔しています。また最近アメリカでは白い悪魔といわれる中性子爆弾を二十年もかけて開発し、生産に入ろうとしていることに、私たち被爆者は憤りを覚えます。

しかも世界でただ一つの被爆国でありながら、日本の国には核兵器を禁止する法律も、被爆者援護法もありません。

老齢化した被爆者は、もう一日も待てないというところまで追いつめられています。

「また政府は、被爆県長崎に欠陥原子力船「むつ」の持ち込みを考えていますが、国民の安全を軽視したまま原子力の開発を推進することは被爆県民として認めがたいことです。」

私たちは望みます。

原爆投下によって起こったあらゆる被害に対して国は責任を持って償いを！

被爆者と遺族の「からだ」「くらし」そして「こころ」の苦しみに対する保障を！

決してヒロシマ・ナガサキを繰り返させぬ平和の保障を！

今年の式典に世界平和のために日夜努力しておられるアメラシンゲ国連総会議長をお迎えしたことは被爆者にとっても、遺族にとってもこのうえない喜びです。

今年はまた、被爆の実相とその後遺症についてＮＧＯ主催による国際問題シンポジウムが開かれました。この成果を来年の国連軍縮特別総会に反映させなければなりません。

生き残った私たち被爆者は一日も早く人道と国際法に反する核兵器をこの地上からなくし、世界の平和を守り抜くことを心を込めて誓います。

一九七七年八月九日

長崎原爆の丘より
被爆者代表　渡辺千恵子

＊「　　」内は、「時間の都合で市役所の方でカットされる」とノート『大会原稿のうつし』に渡辺千恵子氏が記載している部分です。

NGO国際軍縮会議での日本代表の演説

渡辺　千恵子

1978年3月2日　パレ・デ・ナシオン(ジュネーブ)総会会場

議長，来賓ならびに友人のみなさん，私はこれまで遠いヨーロッパへ旅行するなど，夢にも考えたことはありませんでした。ところが，いま私はジュネーブにきて，しかもＮＧＯ国際軍縮会議に参加させていただいています。どうしてこうなったのか，夢のようなこの現実について，まず私は申しあげなければならない気持でいっぱいです。

私は，ここにご出席のみなさまと，みなさまが代表している，平和を愛する人民の世論と運動にたいし，言葉にいいつくせない感謝をささげます。33年前，史上初めて投下された人類絶滅兵器＝核兵器によって死亡した広島・長崎のおびただしい数の市民と，こんにちまで生き残っている30数万の被爆者を代表して，私が死者の言葉でなく，なお生きている人間の言葉をもって，みなさまに語りかけることを可能にしていただいたのは，まさにみなさまだからであります。みなさまの核兵器廃絶への努力と，ねばり強いたたかいこそが，長崎に投下された原爆によって死んで行ったかもしれない私に，生命と人間性の勝利をめざす運動の前進を体験させて下さっているのです。

みなさん，

私が長崎で原爆被害を受けたのは16歳のときでした。工場の崩れた鉄の梁に下半身を押し潰された後，やっと救い出されましたが，被爆後の約１年間は，放射線の強い影響もあったのでしょうか，腰や足の肉が腐り，食物はのどを通らず，危篤状態の苦しみを日夜味わいました。背椎骨折のため，自分の足で歩くことも，立つことすらもできず，その上被爆者を襲うさまざまな障害と病気のため，自分の青春も，健康も奪われ，やがて自暴自棄となり，必死に看病してくれる母をも苦しめました。

私がやっと原爆の死の呪縛から逃れることができたのは，同じ被爆者である母の深い愛情と，1955年，私の母と同じように戦争で苦しめられた世界の母親たちが，ローザンヌで世界母親大会を開き，日本でも，原水爆禁止運動が国民的な規模で始まったのを知ってからでした。

みなさん，

生命を生み育てる母親の心と，原水爆禁止運動がなければ，私が生きてはいなかったと同様に，人類のすべてにとって，核兵器を全面的に禁止することなしに，今後生きつづけることはできないでしょう。

原爆被爆者とは一体どんな人間でしょうか。私は思います。――おこりうる人類絶滅の第１撃を体験させられた人間なのだ，と。

広島・長崎の原爆は，一瞬のうちに恐るべき物理的被害をもたらしただけでなく，広い地域全体の住民の，人間らしい生活を根こそぎ破壊してしまいました。核兵器は，人間の尊さを破壊し，人間そのものを否定する兵器なのです。しかも，被爆者は，被爆当時の悲惨な経験もさることながら，その後30年以上にわたって，たえず，くり返し，いのち，くらし，こころの苦しみにさいなまれてきたのです。したがって被爆者は，人類絶滅戦争の生き証人だといってよいでしょう。

みずから被爆した経験がわたしに語らせる言葉をお聞き下さい。「こんど核兵器が使われるならば，人類は亡びてしまう」。これが原爆を実際に体験したものの結論です。しかも，核兵器使用の非人道性，犯罪性，非合法性は，人道の法，国連憲章，国際法に照らしても明らかだと，専門家からうかがっております。それにもかかわらず，いまなお核兵器の使用禁止すら実現されていないことは，私にとって，胸をかきむしられるような想いです。

私は，平和を願うすべての日本国民とともに，５月末から開かれる国連軍縮特別総会にたいして，核兵器を使うことは人道に反する犯罪としてただちに禁止することを，強く要請します。

みなさん，

昨年，ＮＧＯの主催で「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」が日本で開かれました。このシンポジウムでは，たとえば，1967年に当時のウ・タント事務総長が国連に報告した核兵器白書において，広島・長崎の原爆による死亡者数がいちじるしく過小評価されていることが，明らかにされています。こ

のように，核兵器の恐ろしさについては，まだごく初歩的な事実さえ，かならずしも十分に知られていない，といってよいでしょう。私は，被爆者のひとりとして，国連軍縮センターの活動が強化され，広島・長崎の原爆の恐ろしさ，被爆者の苦しみについての正確な情報をまとめ，全世界に普及されることを期待してやみません。

みなさん，

私は，現代に生きるものにとって，平和を守りぬくためには，核兵器の完全禁止，使用禁止こそが，最優先の課題でなければならないと確信しております。その理由は，すでに述べたところにつきると思いますが，さらにつけ加えれば，核兵器こそは，こんにちの軍拡競争の先端をいく兵器であり，その禁止が，通常兵器をもふくむ軍縮への糸口をきりひらくことになると考えられるからです。私は，きたるべき国連軍縮総会が，核兵器の完全禁止，使用禁止を最優先の課題としてとりあげ，全面的軍縮へむけて歴史的な成果をあげることにより，被爆者にも「生きていてよかった」と言える日が1日も早く訪れることを願っています。

私は，ジュネーブでこの願いをみなさまとともに語り合えるならばと，不自由な体にむちうち，日本代表団の友人に支えられて，ここに参りました。私は33年前死んでいたはずの人間なのです。しかし，原水爆禁止運動のなかで人間として甦り，人間が人間らしい歴史をつくる事業に参加していることを，深く喜びとするものです。

議長，来賓，ならびに友人のみなさん，

私は，開会総会で，被爆者として，みなさまに語りたかったのです。

核兵器による被害者のことばを聞いてから，この歴史的な国際会議が開かれましたなら，会議の中で，もっともっと，真の平和にむかう心が生かされたことでしょう。

日本の被爆者の心が本当に理解されているなら，被爆の実相が本当に知られているなら，明日にでも，核兵器は廃絶されるはずだと考えます。このことを，私は，再度強調しておきたいと思います。

私は，日本の被爆者37万を代表して，ＮＧＯ国際軍縮会議の成功と，核兵器完全禁止，使用禁止の運動の前進を，心から望んで，ご挨拶といたします。

ノーモア・ヒロシマ！
ノーモア・ナガサキ！
ノーモア・ヒバクシャ！

ISDA JNPC 編集出版委員会編集
『被爆の実相と被爆者の実情－1977NGO 被爆問題国際シンポジウム報告書』
（朝日イブニングニュース社、1978 年）385-386 頁